International Institute of Multi-Cultural Studies

特定非営利活動法人

国際比較文化研究所

■ Newsletter ■

Vol. 15　No.3　　2014 年　10 月

鷺の宮卓話

点 と 線

研究所理事長　太田敬雄

あなたは自分に向かって飛来する流れ星を見たことはありますか？

7 月 29 日夜、みずがめ座デルタ南流星群がピークを迎えると知って、私はしばし眺めてみることにした。寝袋を持ち出し、それを枕に庭に横たわりみずがめ座が見えるという南南西の空を眺めていた。どれ位の時間、そうしていたか覚えていないが、四個ほどの流れ星を見た。少なくとも四個。それらは、それぞれに流れ星らしく暗い空を横切り一瞬のうちに消えていった。

その中に一つ、一瞬明るく光った点を見た。あれも流星だったろうと私は思う。

高校時代、私は不真面目に弓道部に属していたことがある。指導者も無く、決まった練習もしていない。道具はあるが、ほぼ名前だけの弓道部だったように思う。私はそこが好きだった。その頃の私には最適の部活だった。一度だけだが、同じ弓道部の友達と弓矢を近くの広場に持ち出し、空に向かって矢を放つという馬鹿なことをやって遊んだことがある。真上に向けて放ったつもりの矢も随分放れたところに落ちた。懸命に真上に向けて矢を放とうとしている内に、落ちてくる矢が点に見えたことがあった。真っ直ぐ自分に向かって飛んでくる矢はもう長さを持った細い棒ではなく小さな点になる。その点から逃げようと思っても、どちらに逃げて良いのかもわからない。実際には自分から結構離れた所に落ちたのだが、一瞬「点」になった矢は恐ろしかった！

夜空に光った点が流れ星だとはなかなか気付かないだろう。元々地上まで落ちることはめったに無いそうだが、もしも地上まで達していたとしたら、その点にしか見えなかった星屑は私のすぐ近くに落ちていたかもしれない。最悪の場合には、私を直撃していたかも知れないのだ。

わが身に降りかかる災難とはそんなものかも知れないと思う。ほかの人から見れば明らかに腺に見え、或いは矢の形が見えて分かることでも、本人には小さな点にしか見えない。それこそが最も警戒すべき災難につながるのだとは想像も出来ない。回りから見ると明らかな問題も当の本人には見えない。例え見えても、何の危険も感じさせない小さな点にしか見えないし、忠告されても分からない。

矢の形が見える時には、飛来する矢を刀で払うことも出来るかも知れないが、点を自分の刀で払い落とすことは至難の業だろう。

振り返って見ると私はそういう場面に何度か遭遇してきたように思う。周りから忠告を受けながら、その度に「大したことは無い」と無視しては突然「点」の直撃を受けて愚かにも傷ついてきた。

―夏の多文化交流 in ぐんまで水鉄砲遊びに興じる学生―

「点」の直撃。その「点」が災いとは限らない。それは豊かな恵みかも知れない。いずれにせよ、当の本人はそのことに気が付くこともなく過ごしてしまうものではないだろうか。

2014 年度第 1 回懇談会

「生活を知れば看護が変わる」講師：恩幣宏美（おんべひろみ）先生

群馬大学大学院保健学研究科看護学講座で看護の研究と教育に携わっておられる恩幣先生を講師としてお招きし、懇談会を 2014 年 11 月 22 日、午後 2 時から安中市のまなぱる XD で開催します。

詳細は同封のチラシをご覧下さい。一人でも多くの方のご来場をお待ち申し上げております。

国際比較文化研究所創立１５周年記念企画

ぐんまカップ

インドネシアでの日本語コンテスト（スピーチ・作文）の優秀者を群馬に招聘！

群馬カップ企画運営代表
群馬県立女子大学
国際コミュニケーション学部
３年　菅谷 佳名子

夏の余韻を残しつつも秋風が気持ちよい季節となりました。そんなさわやかな９月に国際比較文化研究所での新たな試みが動きだしました。「ぐんまカップ −Japanese Speech and Essay Contest in INDONESIA−」。日本語コンテストをインドネシアのマランで開催し、優秀者を群馬県に招聘するという企画です。私はこの群馬カップで企画運営代表を務めさせていただくことになりました。この場をお借りして企画に込める想い、実現した先にあるものなどをお話したいと思います。

研究所では長きに渡り「より豊かで平和な地球社会」の実現に向けて多文化交流を日本の群馬県・静岡県、インドネシアのマラン、韓国の釜山、台湾、アメリカで実施してきました。学生が中心となってプログラムを組み、様々なバックグラウンドで育ってきた者同士が集い、最高の思い出を胸に再会を誓い合う。そうして私たちは友人となり、信頼関係を築いてゆく。過去にスタッフを経験したことから、多文化交流で得られるものは理解ではなく尊重であると感じてきました。それは、人種や宗教、文化、言語を超えて個性が響き合うということであり、自分が知らない世界がまだまだあるという気づきです。

ぐんまカップでは研究所が育んできたこの多様性の輪を、さらに大きな輪にする企画です。日本語コンテストはスピーチとエッセイによって日本語能力に優れたインドネシア人学生を選出し、招聘プログラムでは今までの文化交流に加えて県内企業にご協力いただいて企業訪問や働く先輩方へのインタビューの実施などを計画しています。これは単なるコンテストや職業マッチングではありません。この企画の真ん中にあるのは「パートナーシップ」です。インドネシアは近年その市場価値が認められています。親日家が多く、日本企業も多く進出している国のひとつです。しかし、経済や産業では語り尽くすことのできない文化や個性にもフォーカスすることができたら、パートナーとしての関係が築けるのではないか。そんな想いを抱きながら今回企画をしています。

企画運営は私を含めた学生７名で現在行っていますが、ぐんまカップは研究所理事の皆様や会員の皆様からのご意見、ご声援をいただき実現できるものです。クラウドファンディングによる資金調達や県内企業とのコラボレーションなど、初めての挑戦が続きますが来年５月の日本語コンテスト、８月の招聘実施に向けて精進して参りたいと思います。どうか応援よろしくお願いいたします。

更なる高みを目指して

研究所長　太田敬雄

「選ばれた者」という意識が人に自信と自覚を与え、更なる高みを目指す意欲を培います。ぐんまカップは、それを企画し運営する日本の学生にとっても、またコンテストを勝ち抜いて群馬で交流をする機会を得ようとする若者達にとっても選ばれた者としての自覚を持つ機会です。

吉田松陰の下に集まった若者達が、大きな夢を育み、やがて日本の夜明けを担っていきました。ぐんまカップに集まる企画者と応募者たちは、日本語コンテストと群馬での交流を通して大きな夢を育み、やがては明日の平和な地球社会を創り上げる者として育ってくれることでしょう。

企画運営代表の菅谷さんの言葉を借りるなら「得られるものは理解ではなく尊重」であることを認識し、友人として世界の若者がお互いを尊敬しつつ手を繋ぎあい、そのネットワークを地球全体に広げていく。その出発点を今私たちは目の当たりにしています。

松蔭の松下村塾が小さな一軒家であったように、ぐんまカップはインドネシアの東ジャワを中心とした地域の若者と群馬県という、どちらもそれぞれの国では余り目立たない所を、夢を広げる舞台としています。しかし、その夢が確かなものであれば、やがては世界各地で開催され、世界中から群馬に集まってくる壮大なコンテストとなっていくことでしょう。

今は、この企画の実施のために研究所の会員や会友の皆さまのご協力を必要としています。皆様の励ましによって、ぐんまカップは必ず大きな動きとして発展していきます。声援をお願いします。皆様、企画担当者やコンテスト応募者の背中を押して下さい。

共に壮大な夢を育てましょう。

ぐんまカップ顧問

山内信幸先生
日本比較文化学会前会長
同志社大学教授

国際交流の基本は、人と人との点的交流にあります。それを線対線あるいは面対面の形に育てていくには、何らかの「仕掛けが」が必要です。
それを可能にしてくれるのがこの「ぐんまカップ」であると信じています。

大野克美氏
公益財団法人東南アジア文化友好協会理事長
万座温泉日進館常務取締役社長

私は40年間以上アジアの国々の人達に会ってきました。これからのグローバルな時代に生きるのに大事なこととは何かを考えます。これからの日本とアジアの時代を考えると、青年達の交流を通して平和と繁栄を築くことがとても重要なことになります。あなたの若き日に、あなたの最も大事なアジアの友人をつくる。これ以上重要な仕事はありません。「ぐんまカップ」の成功を祈ります。

IIMS のアイドルグループ
SET26
順調に始動中！

今年度の定款改定に伴い発足した学生会員制度で入会した学生会員が Student Exchange Team=SET26 としてそれぞれ活動を始めています。（注：２６は平成26年度を意味し、メンバー数では有りません）

現在、SET メンバーとして活躍しているのは、群馬県立女子大学、群馬大学、高崎経済大学、常葉大学、日本大学、法政大学などの学生です。彼らは多文化交流 in ぐんま、多文化交流 in 静岡、多文化交流 in 韓国、多文化交流 in マラン、ぐんまカップのいずれかのスタッフとして活躍してくれています。

2014 夏の多文化交流 in ぐんまは高崎経済大学の斎藤恒平君をリーダーに 6 名がスタッフとして頑張ってくれました。同じく夏の多文化交流 in 韓国は高崎経済大学の岸綾夏さんが企画・運営の全てを担い、さらに引率としても大活躍をしてくれました。

2015 年 2 月に開催する多文化交流 in ぐんまについては、現在高崎経済大学の斉木雄作君をリーダーに 5 名のスタッフが集まっています。準備は 11 月から始める予定です。

同じく、2015 年 2 月に開催予定の多文化交流 in 静岡は常葉大学の杉本有規君を中心に常葉大の多文化サークルのメンバーで担当します。

2015 年 3 月に予定している多文化交流 in マランについては、群馬県立女子大学の脇優美さん、増井杏奈さんがコーリーダーとして、まもなく企画・運営を始めます。引率も二人にお願いする予定です。

今回、新たに立ち上げるぐんまカップについては、群馬県立女子大学の菅谷佳名子さんをリーダーに5大学に学ぶ8名の学生が現在スタッフとして活躍を始めています。この企画は 2015 年度に本番の日本語コンテストと招聘が実施されることになります。14 年度で卒業するメンバーも居ますので、今年度末までには来年度のスタッフを追加する予定です。

SET26 これからの予定

多文化交流 in ぐんま
2015 年 2 月 12 日（木）～14 日（土）

多文化交流 in 静岡
2015 年 2 月 16 日（月）～18 日(水)
この間 14 日から 16 日まで、群馬・静岡の双方に参加する海外からの参加者・インドネシアからの招聘生のために群馬でホームステイを実施し、ぐんまからホームステイ、そして静岡を併せて「多文化交流 in 日本」とします。

多文化交流 in マラン
2015 年 3 月 2 日（月）～11 日（水）
ただし、2 日は成田前泊となりマランへは 3 日に出発します。

ぐんまカップ
＜日本語コンテスト＞
2015 年 5 月中旬　マランにて開催。
＜招聘プログラム＞
2015 年 8 月下旬の予定。

それぞれのスタッフが、地域とスタッフの個性を活かしたプログラムを立ち上げてくれることを楽しみにしています。

「多文化交流」に与えられた夢

2014 年 9 月 7 日
ブラウィジャヤ大学日本語講師
ウィラスティ・アンレニ

人はそれぞれの話の主人公になるということをずっと信じています。その話の結末、どうやって終わるかもちろん運命だけに任される訳には行かない。勇気っていうものも必要だと思います。

子供の時に教師になると言う夢を抱いていました。もちろん単純な夢でした。それはある学校で最後まで教師をやって、そのまま人生が終わるだろうなって思いました。太田先生が考えてくれた多文化交流に参加するまでは人生なんて運命を沿って生きるだけで十分だなぁってずっと思っていました。でも、やはり人生は運命だけに任される訳には行かないです。

太田先生に最初に会ったのは大学の 1 年生でした（ちょっと忘れましたが、2005 年だと思います)。その時は新井美幸と言う先生を通して知りました。太田先生はブラウィジャヤ大学を訪問しましたが、私にとって、太田先生は単なる知らないおじさんでした。

そして 2007 年 9 月に多文化交流 in マランが実施されました。日本人の通訳者の応募があって、参加するかしないか迷っていました。日本語を勉強して、日本人と交流できるのは、その時なかなかない機会でしたが、自分の日本語の能力ではうまく日本人とお話ができるのかと悩んでいました。でも、その悩みは好奇心に負け、多文化交流 in マランに参加することにしました。

日本の文化はもちろん、それまで自分が知らなかった自分の国の文化もたくさん知っていただきました。いい事ばかり学び、短期の恋もしていました(笑)。多文化交流 in マランが終わって、全部このままで終わりだろうなぁと思いましたが、その後、多文化交流で知り合ったみんなと意外と連絡が続きました。そして、人生の最大の機会が訪れました。なんと 2 週間ぐらい日本に招待していただくことになりました。本当のこと言うと、実は日本に行けることがもう遠くに諦めましたが、まさか多文化交流 in マランに参加したおかげで、日本に行けるとは夢にも思いませんでした。

訪日するため、色々な準備をした後に夢の国「日本」に行くことができました。飛行機が成田空港に着陸する直前の日本の景色を空から見ました。涙が静かに溢れました。着陸した時にも「これは夢だ」とずっと感じていました。今もその時の気持ちは忘れていません。本当の日本を色々体験でき、マランで出会った人達にもまた会えて、そして新しい仲間や家族もまた出来ました。

そして、人の前で話しをするのが苦手だった自分、人間嫌いな自分がこんなに人と接触できるのかとびっくりしました。多文化交流のおかげで好奇心が満たされただけでなく、いつの間にか自分に自信も持てるようになり、他人のことを好きになっていました。本当に、一気に成長しました。た。その次には、帰国後に新たな自分と新たな目標までできました。そして、次々と多文化交流 in マランで活躍できました。自分がずっとずっと成長している気がします。

そのおかげで、「自分の力でまたみんなに会いたい」と言う気持ちで、2010 年に文部科学省の奨学金を得て 1 年間日本に留学できました。また色々体験ができ、多文化交流 in マランで知り合ってずっと仲良くしていた仲間たちも何回も会っていました。本当に生涯の友達ができたように感じました。血が繋がっていない家族もできて、何よりも嬉しいことです。

その後、留学期間が終わって、帰国しました。インドネシアでの勉強も続いています。帰国してから 1 年後に卒業するはずの自分が何故かなかなか卒業できませんでした。担任の先生と論文の討論が続き、解決方法が見当たらなったので、仕事に逃げてしまいました。日系企業で働いていて、卒業論文はなかなか続きませんでした。まぁ、なかなか卒業できなかった一番の理由は怠けていたからだと思います。それでも、今年は諦めないでやっと卒業ができました。それも家族、仲良しの友達、太田先生、そして多文化交流で出会っていた仲間たちの励ましと応援のおかげでだと思います。本当にみんなのおかげで諦めないで最後まで頑張れたと思います。

そして、今は母校で非常勤講師として働いています。その隙間に通訳のバイトも楽しんでいます。人間嫌いな人だったの私はこれからも新しい人に出会い、また色んな考え方を持つ人と交流ができることを楽しみにしています。多文化交流のおかげで色々成長しました。この成長はこれからもずっと続くと思います。このきっかけを作るのは大田先生だと思います。

私にとって、太田先生は先生でもあり、血が繋がっていないお父さんでもあり、私の友達の存在です。言葉に表せないぐらい太田先生にすごく感謝します。そして、先生に伝えたいことがあります。

「太田先生、私の夢はまだまだ終わっていないです。それは先生のおかげでもあるんです。ありがとうございます、これからも宜しくお願いします」

2011 太田家でのウィラスティ（左端）送別会の一こま

多文化交流 in 韓国

2014 年 8 月 21 日～28 日　釜山・ソウルの交流の旅　釜山外国語大學・檀國大學

‘引率者’そして ‘集大成’としての多文化交流

高崎経済大学 4 年
岸　綾夏

今では多文化交流の恒例となっている、「多文化交流 in 韓国」。7 回目となる今年度の開催は成田前泊も含め、8 月 21 日から 28 日にかけて行われました。私自身、3 年前に多文化交流を通して初めて訪れ、かけがえのない国となった韓国。今回は引率者という立場で多文化交流 in 韓国に参加させていただきました。そして、大学生活は多文化に費やしてきたといっても過言ではないほど多文化交流にはまりにはまった私にとって、集大成ともいえる大仕事でもありました。

想像していた通り、引率者という立場は大変なことが多かったです。みんなを急かしながら行動しないといけなかったり、時には厳しいことも言わないといけない時もありました。韓国側の学生の大変さも大いに伝わってくるため、どう参加者に協力してもらったら
よいのかと悩むことも多かったです。それに加え、釜山では記録的な大雨にも見舞われてしまい、天気がよければもっと違う交流が出来たかもしれないと、実は一人で責任を感じたりしていたものです。しかし、そんな状況の中でも、参加者たちが純粋に楽しんでいる様子を見て、何度も何度も救われました。釜山での別れ際、KTX の車内で大泣きする後輩たちの姿は、本当に忘れられません。言葉では表すことができない感動に包まれたことを今でもはっきりと覚えています。今回の参加者のみんなと一緒に韓国に来ることができてよかったと心の底から思いました。

ソウルでも、皆の力を合わせるとこんなにも素敵な空間が生まれるのかと思った瞬間が数多くありました。釜山に比べ、言葉が通じない、コミュニケーションがしにくい時もあったかと思うのですが、同世代の強みを活かして意気投合していく姿がみられ、頼もしささえ感じました。こういったかけがえのない交流を通して、人と人のつながりが生まれていくのだと実感しました。

帰国して約 1 ヶ月になりますが、参加者の多くが充実しすぎていたこの 1 週間が名残惜しく感じており、今でも頻繁に連絡を取り合い、つながり続けております。参加者一人一人が観光とは一味違う‘多文化交流’を体感してくれた成果ではないかと思います。そして、私自身、多文化交流 in 韓国 2014 に引率者として参加できたことは人生の中で確実に「財産」になりました。

この多文化韓国に関わってくれた人々やここまで私が多文化に関わり続けることができたすべての方々に感謝の思いでいっぱいです。今後はこの多文化の意思を引き継ぐ必要があるのだと思っています。いつか引率者を務め上げることができる後輩も育てなくてはとも思います。今回の経験を大きな一歩として、私はこれからも「多文化」に関わり続けることができたらと感じています。

多文化交流 in 韓国に参加して

高崎経済大学 1 年
小室　嘉奈子

私は今回引率を務めてくださった岸さんによるこの企画のプレゼンを大学で聴き、多文化の世界に興味を持ち、初めて多文化交流に参加しました。韓国はずっと行きたいと思っていた国の一つでしたし、現地の学生はどんな人たちだろうと行く前からとても楽しみにしていましたが、あまり積極的な性格ではない私がうまく交流できるか、少し不安もありました。しかし韓国の学生はみな温かく迎え入れてくれて、とても安心しました。一緒にご飯を食べたり遊んだりしているうちに自然と仲良くなり、多くの人とお互いの国や自分のことなど、とにかくいろいろなことを深く本音で話すことができてとてもうれしかったです。特に軍隊の話は、日本人には馴染みがなくいろいろ考えさせられました。日本と韓国は地理的にとても近く、都市部の街並みや山村の景色、顔立ちや物事の捉え方など似ている部分が多いように思われますが、生活している中で様々な違いがあることが分かり、とても興味深かったです。

また、両国ともに参加者全員の、この交流をより良いものにしよう、何より自分たち自身が楽しもうという強い気持ちを感じました。特に韓国の学生のみなさんは私たちのためにいろいろなプランを考えてくれていて、一日一日がとても楽しく充実したものとなりました。

今回多文化交流に参加して、何でも自分で感じることの大切さを改めて実感しました。こういう味なんだ、こんな場所なんだ、こういう考え方をしているんだ…と、誰かの体験談を聞くのではなく自分自身が体験することで、より深く異文化に触れることができたと思います。こういった経験をしたことで、自分と異なるバックグラウンドを持っている人の生活や考え方に関心を持つようになりました。今後このような機会があれば、ぜひ参加してみたいと思います。

参加者の皆さんとは日本に帰ってきてからも連絡を取り合い、楽しく交流しています。韓国にいた時より、帰ってきてからいろいろ話す(p６右下へ)

韓国の受け入れ側の学生からの感

釜山外国語大学3年
のびのび会長
パク・ドクホン（박　덕홍）

多文化交流、今回で4回目の参加となりますが参加するたびにいろんなことを感じます。
知らなかったお互いの文化、価値観などがそれです。これだけでも多文化交流に参加する価値は十分にあると思いますが多文化交流に参加することで得られるのはそれだけじゃありません。

多文化交流で得られる一番大切なのは絆です。その絆は行事の期間だけじゃなく交流が終わったあとにも参加者同士を繋いでいます。私が日本に行くときにはいつもその近くの参加者たちが会いに来てくれます。それは韓国の時も一緒です。これがどれだけ大切なのかは実際感じてみなければ理解できない種類のことだと思いますがそれこそが絆、因縁とも呼ばれるものだと思います。韓国と日本、両国の関係が良くない今、これほど純粋に人と人同士の交流ができるところはわたしがしっているかぎりありません。この多文化交流はわたしにとても大切な経験と絆を与えてくれました。もう4回目ですが来年も参加したいと思うのはそれほど楽しかったしそこで得られる縁とても大切だからです。ありがとうございます。

出発前　成田空港にて

引率者、岸さんの挨拶

とても大切な思い出
多文化交流

檀國大學卒　チェ・スンウ
（최　승우）

大学を卒業して大学院の準備をしていた私に、ある日私の担当教授だったピョン先生からメールが来た。今回多文化交流をソウルで行う予定だから学生達を集めてほしいという内容のメールだった。私も3年生のころだった一昨年に参加した経験はあるけど、いざと担当引率者になろうとしたらプレッシャがすごかった。それにまた今回は日本から来る学生の人数が多かったので、プレッシャは二倍三倍になったわけだった。

まず、人を集めることから始めた。でもなかなか人数が集めなかったので、しかたなく直接学校に行って一人一人に頼んた。その結果12人ぐらいの学生を集めることができた。その後はソウルの観光コースを組むことだった。ソールに住みながらもソールについて詳しくなかった私は何日ぐらいインターネットで調べながら万般の準備をした。

いよいよ約束した２８日になった。ソウル駅から出る日本の学生達は昨日の釜山の大雨のせいかたしか疲れ気味だった。でもみんな明るさだけは除かない姿だった。ホテルまで一緒に行ってグループで活動をしたがあいにくソウルも雨が降ったのでいろんなところには行けなかった。でも幸に次の日には天気がよかったので、いろんなところに行くことができた。

そしてついに別れのときが来た。焼肉屋でやきにくをたべてから店のまえで最後の挨拶をしたが自分も含めて一人も残さずみんな別れたくない様子だった。泣いてしまった学生も見つけることができた。記念撮影まで終わって家に帰る電車の中、また次の日まで韓国の学生達は＇本当に参加して良かった。＇＇もう一度参加したい。＇などの言葉を私に言ってくれて本当に胸がいっぱいだった。

あいにく私は卒業してもう参加するのが出来ないけど今回に来た学生達と大切な絆つづきたいと思った。別れてから1週間しか過ごしてないけど、もうみんなに会いたい。みんなぜひまた会おうよ。

（p５　小室さんの続き）ようになった人もいて、この交流は一つのきっかけだったのだと実感しています。今回このように素晴らしい経験ができたのも、今まで多文化交流に関わってきた方々の国を超えたつながりや、スタッフの皆さんの見えないところでの努力があってこそのことだと思います。今回多文化交流に関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。

「日本語の授業」他

マランの高校、「MAN３での教育実習レポート」より抜粋

東京大学大学院法学政治学研究科　杉浦翔太

はじめに

私は2014年9月3日から28日までの約1ヶ月間、インドネシアのマラン市にあるイスラム高校 MAN3で、日本語教師としてのインターンシップ・プログラムに参加してきました。このインターンシップ・プログラムはインドネシアの MAN3 と群馬県のNPO 法人国際比較文化研究所 (International Institute of Multi-Cultural Studies)との提携で行われているもので、MAN3、IIMS 双方から多大なご協力とご支援をいただいて、無事に一ヶ月のインターンを終えることができました。(中略)

MAN3 では多くの生徒が選択科目として日本語を学んでおり、私は日本語教員のアリフ先生のアシスタントティーチャーとして、日本語や日本文化についての授業を行いました。私の大学院での専攻は教育学ではなく法律学ですが、MAN3 でのインターンシップでインドネシアの文化や言語、宗教について学び、将来それを国際的な法律家としての仕事に活かしていきたいと思い、本インターンシップ・プログラムに参加いたしました。

日本語の授業

MAN3 では日本語のクラスが 10 以上あり、アリフ先生がすべてのクラスを担当されています。MAN3 での授業1コマの時間は 45 分ですが、どのクラスも2コマないし3コマ連続で日本語の授業があるので、短いクラスでも 90 分、長いクラスでは昼食をはさんで 135 分間の日本語の授業があります。日本語の授業は選択科目であることも手伝って、とても意欲のある生徒が多いように感じました。多くの生徒は日本のマンガやアニメ、ドラマなどのサブカルチャーに日頃から親しんでおり、そうした興味関心から日本語の学習にも熱心に取り組んでいるようでした。またサブカルチャーだけでなく、将来日本の大学で科学分野の研究をしたいという理由で日本語に興味を持つ生徒も少なからずいました。

最初の週はすべてのクラスで自己紹介と質疑応答を行いました。日本語の授業なので、自己紹介は最初に日本語で、次に同内容をインドネシア語で行うスタイルをとりました。名前や出身地、年齢などの表現に関しては、生徒たちは日本語だけでも十分に理解しているようでした。質疑応答は生徒たちに英語で質問してもらい、回答は最初に日本語で、次に英語で行うスタイルをとりました。非常に印象的だったのは、生徒たちの英語がとても上手だということと、質疑応答のあいだ質問が一切途絶えないということです。私の高校時代を思い出すと英語でのコミュニケーションなんて全然とれなかったうえ、英語ができたとしても、みんな恥ずかしがって質問をしないような雰囲気があったように思います。しかし MAN3 ではいつも生徒たちが流暢な英語で矢継ぎ早に質問を投げかけてくれるので、そのことに驚きを感じつつも、生徒たちの熱心な姿勢に可能な限り応えたいという思いで、わずかな知識と貧弱な英語力を総動員して回答をしていました。(以下略)

日本語クラブ

月曜日と火曜日の放課後は日本語クラブの活動に参加しました。日本語クラブを担当なさっているのはアリフ先生の元教え子で、今は別の高校で日本語を教えているピンキー先生です。

私がインターンシップを行った 9 月は、ちょうど翌月にブラウィジャヤ大学日本語学科が主催する日本祭りを控えており、生徒たちは各々が参加するコンテストの準備をしているところでした。アニメキャラクターをテーマにしたお弁当コンテストや、日本語での演劇コンテストが開かれるらしく、私は演劇セクションの台本を翻訳するのを手伝わせてもらいました。

放課後

授業が終わってから寝るまでの時間はほとんど生徒と話して過ごしていました。Wi-Fi スペースで休んでいると自然と生徒たちが集まってきてくれて、夕方のお祈りの時間まで生徒たちと様々な話題について話をしていました。生徒の大半は学校の寮に住んでいて、私も学校構内のゲストハウスに滞在していたため、遅い日は夕食を挟んで夜 10 時頃までずっと話し込んでいました。

日本語のレッスンをしてみたり、生徒と恋愛トークに興じたりしてみたりする中で、生徒たちの文化や考え方に触れることもできました。中にはアラビア語レッスンをしてくれた生徒もいて、とても楽しい毎日でした。なお習ったアラビア語は翌日の授業で使ってみたものの、発音が悪すぎてなかなか伝わらず、その場でさらに発音レッスンまで受けることになりました。

ぐんまカップ成功のために皆様のお力を貸して下さい

企画・運営は学生会員 SET のメンバーが当たり、素晴らしい活動を始めています。しかし、この企画の実現には多くの皆様のお力を必要としています。先ずはご協賛下さる団体、ご寄付下さる方々が求められています。一口２０万円の御協力を頂きますとコンテストに企業名もしくは個人名を冠した冠賞を設けます！（4 社まで）その他のご協賛は一口３万円。ご寄付は金額設定はしていません。一社でも多くの企業、一人でも多くの方々に支えられることが大事だと思っています。

日本語コンテストは予選を行ないますが、予選敗退者も将来良い交流が出来る相手として大事にしていきたいです。予選敗退者とメール（日本語）で交流して下さる方もまた貴重な協力者になります。また、スタッフへの励ましのお言葉も頂ければ幸いです。

来年夏には、コンテスト勝者を招聘することになりますが、ホームステイをお引き受け下さる方もこれから募集していくことになります。

5 月にはインドネシアに同行してコンテスト運営をサポートしながらマラン見学をなさりたい方も大歓迎です。

研究所からのご連絡とお願い

1、**研究所ホームページ、Facebook、まなぱるホームページ**は見ていただけましたか？ニューズレターもカラーで見られます。まだご覧になっておられない方は、ゼヒ一度開いてみて下さい。

2、**振込方法について：**前号でもお知らせしましたが、会費の振込、ご寄附の振込には赤い振込用紙を皆様にお届けしています。その振込方法によって手数料が変わります。通常の振込（5 万円まで）の場合は①窓口扱いで払込みされますと手数料が 130 円かかります。②郵便局のＡＴＭにこの振込用紙を入れてＡＴＭ扱いで払込まれますと、手数料は 80 円で済みます。さらに③振替口座・総合講座をお持ちの方がＡＴＭ扱いの電信振替で送金して下さいますと手数料は 0 円となります。勿論、ご都合の良い方法でお振込いただけば良いのですが、「どちらでも構わない」場合には手数料の安い方をご選択ください。

3、**会費とご寄附のお願い：**研究所の活動は、基本的に皆様からの会費とご寄附によって支えられています。これまで同様に会費・ご寄附でお支え下さいますようお願いします。会員以外の方も、数年に一度で結構ですから、ニューズレター郵送代のご寄附をお願いできれば幸いです。

特に今回は「ぐんまカップ」への皆様のご寄付をお願いします。

会費・寄付（2014 年 7 月 11 日～10 月 10 日）敬称略

＜入会＞ 遠藤稔。

＜入会：学生会員＞ 石野留衣、鈴木佳乃、手島愛美、野口泰佳、柏崎朱音、増井杏奈、吉田萌、藤巻拓、今井敏晴。

＜会費＞川口知幸、植原映子、二村摂三、森泉宏昭、佐藤秀男、小林久子、堀口榮一郎、佐野啓予、高山舞、遠藤稔、阿部洋一、柴山享、森泉孝行。

＜寄附＞

○一般寄附　入沢京子、小森谷、川口知幸、庄田妙子、村井田和夫、松本英子、森泉宏昭、久保正幸、小林久子、池田章二、遠藤稔、岸秀樹、柴山享、

○招聘　日下浩樹、堀口榮一郎。

○多文化交流　村井田和夫、岸秀樹、柴山享。

○まなぱる　植原映子、村井田和夫、内田浩良、柴山享。

《編集後記》第 3 号の発行は 9 月中を予定していましたが、すっかり送れてこんな時期になってしまいました。そのため、10 月に予定していた恩幣先生の懇談会も日程を変更して頂くことになってしまいました。お詫び申し上げます（太田）

発行　特定非営利活動法人国際比較文化研究所
事務所：〒379-0124 **群馬県安中市鷺宮** 3413-3
電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393
研究所ホームページ：http://www8.wind.ne.jp/mthc
まなぱる：http://manapal.gunmablog.net/e80854.html
郵便振替口座番号：00510-1-61974
加入者名：国際比較文化研究所